

平 家盛が建立した神鳥神社では、毎年神楽が奉納されている。宇久島には、この神鳥神社に奉納される神鳥流と、宇久島神社に奉納される宇久島流の二つの神楽が存在する。どちらも「五島神楽」の一つで、四百年以上の歴史がある。

「宇久神楽保存会」の会長であり、宇久島神社の十四代宮司でもある月川徹さんは「実は高齢化や担い手不足のために、神鳥流は十年、宇久島流は四十年にわたって途絶えていました」と話す。本来、神鳥流も宇久島流も宮司の一族が舞うのが決まり。しかし「どうにかして復活したい」という思いから、二〇一五年に保存会を立ち上げ、島民へと呼びかけた。「島の子どもたちは『神楽って何?』という感じで、そこからのスタートだったんです」と月川さんは笑うが、復活までの道のりは険しかった。

神楽は代々、口伝えで伝承されてきた。月川さんも幼い頃から祖父や父の指導を仰いで覚えたという。「復活しようと思っても、残っているのは唄本だけでした。しかしいくつかの演目に関しては舞の動きだけでなく、笛や太鼓まで覚えていました。三つ子の魂百までというやつです」。

二つの神楽が復活したのは二年前。月川さんは神楽を舞う子どもたちの姿を見て、「太鼓を叩きながら涙を流しました」と言う。生きているうちに神楽をなんとか復活させたい——その強い思いが実を結んだ瞬間だった。

途絶えていた宇久島の神楽が復活を遂げたことで、新たな展開があった。「五島藩発祥の地である宇久島の神楽が復活したことを受けて、昨年『五島神楽』が国の重要無形民俗文化財に指定されました。これは本当にうれしかったですね」。

宇久島神社では秋の例大祭の日、大行列が島を練り歩く。そこには神楽の面をかぶった猿田彦や獅子舞の姿も見られる。「獅子舞」は宇久島流ならではのものです。今回見事に復活を遂げた演目のひとつ。行列の際、寄ってくる子どもたちの頭を噛むのだろう。色がはげ落ちた獅子舞の歯は、この島の伝統を守り続けている誇りのように思えた。

※五島神楽／宇久、上五島、有川、福江、富江、玉之浦、岐宿の七つがあり、これらを総称して「五島神楽」という。

「宇久神楽保存会」会長の月川徹さん



江戸時代「岩戸間」という演目で使われていた天蓋。箱には「文政九年」の文字が見える。

大切に受け継がれている獅子頭

宇久島神社の境内

宇久島  
受け継がれてきた伝統の神楽

宇久神楽保存会  
佐世保市宇久町神浦2189  
(宇久島神社)  
TEL.0959-58-2407